

今週のメニュー

■トピックス

◇空気調和・衛生工学会大会発表

■随想

◇古代ヤマトの遠景〔番外〕(35)

木下 清隆

■トピックス

◇空気調和・衛生工学会大会発表

9月12日(水)から9月14日(金)まで3日間にわたり、空気調和・衛生工学会全国大会が、名古屋市の大同大学滝春キャンパスで開催されました。大会は、大学や、企業などが昨年度実施した研究成果を論文、技術展示などで発表するもので、11会場で、650件以上の論文発表がありました。総数1,200人程度の参加者があり、どのセッションも、会場は概ね満席の状態です。活気ある報告と質疑応答がされていました。

VECの関連では、3年目を迎えた [ZEB/ZEHの実現を考える会](#)の研究成果として、日建設計総合研究所より「ホテル施設における窓改修による省エネ効果および温熱環境改善効果の検証」について、芝浦工業大学秋元研究室より「高齢者福祉施設における内窓設置による省エネ効果および温熱環境改善効果の検証」について発表していただきましたので、紹介いたします。



箱根のホテル施設において、アルミ窓(アルミサッシ+単板ガラス)に対する、改修による樹脂窓(樹脂サッシ+Low-E⁽¹⁾ガラス)設置効果を、夏期・冬期について各客室の温熱環境および空調の処理熱量の実測により明らかにしました。夏期・冬期共に、樹脂窓の方が窓際と室内中央、あるいは室内での高さによる温度差が小さい傾向があり、特に冬期の窓際ではアルミ窓の足元の温度が樹脂窓より1°C低く、床上1,100mmでは1°C高い結果となりました。室内温度を維持するために空調が強く作動して顔付近は暑くなり、足元は窓で冷えた空気が床を這うコールドドラフト現象で冷たくなると考えられます。つまり、顔が暑い反面足元が寒いというアルミ窓の不快感が、樹脂窓に変更することで改善されることを示しています。空調の処理熱量は、夏期はアルミ窓に対し0.8kWh/日増加しましたが冬期は6.0kWh/日減少しました。冬期はアルミ窓に対し31%の削減になっています。通年でもかなりの省エネが期待できる結果です。今回初めて、実際に使われているホテルの客室において、アルミ窓と樹脂窓の部屋の比較を、宿泊客と同様の行動を行って測定することができました。この結果の発表により、ビルへの樹脂窓の普及に弾みがつくことを期待しています。

秩父の高齢者福祉施設では、アルミ窓の部屋とそれに樹脂製内窓(Low-Eガラス)を取り付

けた部屋で、ホテル同様に夏期・冬期の実測を行いました。特に冬期で内窓設置の効果が大きく、ホテル同様に内窓付の方が窓際と室内中央、あるいは室内での高さによる温度差が小さい傾向がありました。このような温熱環境の改善は高血圧や血圧変動の抑制に効果があり、脳卒中などの予防が期待できると言われています⁽²⁾。また、ガラス、サッシ共に内窓の表面温度が高く、アルミ窓では露点温度以下になる時間が1割程度あるのが、内窓付ではほとんどなくなることが明らかになりました。つまり、病気の原因になるとされるカビの発生に関係する結露が、内窓設置で著しく抑制できることがわかりました。冬期のエアコンの消費電力は、内窓付の方が3%少ない結果になりました。なお、ホテルの空調処理熱量の差に比べて、高齢者福祉施設の消費電力差が小さいのは、各室が開放状態であることや、上下階や隣室の構造が違うことの影響が推定されています。

以上、樹脂窓(内窓)の効果が、温熱環境測定などの実測によって明らかになり、専門の学会で発表されました。今後は、これらの結果をまとめて紹介するパンフレットを作成して、ビルへの樹脂窓の普及を促進していきたいと計画しています。

- (1) 複層ガラスの内、内面に特殊な金属膜を設けたもので、遮熱型と断熱型の2種類がある。
- (2) 東京都健康長寿医療センター研究所 H25 年報告書

■ 随想

◇古代ヤマトの遠景〔番外〕(35)

木下 清隆

<前回とのつながり>

博多の櫛田神社の祭神、大若子命の女神説について、前回までに検討したが、女神説は成り立たないことが判明したため、今回から、何故に大若子命が、博多に地に勧請されたのかを検討する。

4 祭神大若子命説

櫛田神社の主祭神は江戸時代初期においても、現代においても大若子命となっていることから、天平宝字の勧請時期から継続して、大若子命であったと考えることができる。ところが、なぜ大若子命を勧請したのかという基本的な問題は残されている。以下にこの問題の検討を進めるが、そのための方策として、次のような切り口で考えることにする。

- ① 伊勢の櫛田神社の祭神が櫛玉命から大若子命に替えられた後で、この命を勧請した。これを「大若子命直接勧請説」とする。
- ② 初めに伊勢の櫛田神社の櫛玉命が勧請されたが、その後、大若子命に替えられた。これを「大若子命間接勧請説」とする。
- ③ 初めに河内の櫛田神社の櫛玉命が勧請されたが、その後、大若子命に替えられた。これを「大若子命河内経由説」とする。

このような三つの説が考えられるが、③は貝原益軒の『筑前国続風土記』の所伝を考慮した



博多 櫛田神社

ものである。ただ、この③の大若子命河内經由説は、②の大若子命間接勧請説の内容が、特定の地を經由して博多に入ってきたことを示しているのに過ぎないので、以後は②に含めて考えることにする。

4-1 直接勧請説

先ず「伊勢の櫛田神社の祭神が櫛玉命から大若子命に替えられた後で、この命を勧請した」場合であるが、このような形で祭神が勧請された場合の有利な点は、初めに大若子命ありき、となるため「なぜ大若子命なのか」の問題は無くなることである。ところが、天平宝字元年(七五七)とされる時期に、わざわざ伊勢から「なぜ大若子命を招いたのか」の理由の説明は難しくなる。確かにこの時期は先に説明したように朝廷を中心として、大若子命の評価が高まりつつあった時代といえる。しかし未だ一部の高位の女性たちが、関心を持ち始めた程度の時期と考えられ、遠く離れた博多で大若子命を勧請してまで、どこかに配慮を示さなければならない状況にあったとは考えられない。とにかく大若子命など、博多には縁もゆかりも無い命である。その命を何の脈絡も無く勧請するなどは、普通では考えられないことである。しかし、もし、何か別の強い誘因があったとすれば話は変わってくる。そこで一つの仮定を置いてみて、その可能性を探ってみることにする。その仮定とは「大若子命海神説」である。以下はその可能性である。

『倭姫命世記』の中に地名として度会が出てくるときは、殆どの場合「百船度会^{ひやくせんわたらい}」の枕詞が付いている。これは、「多くの船の行き交う度会」といった意味であるが、このことは度会の地が湊であったことを意味している。百船度会の名でこの地が知られていたということは、古来、伊勢の地は東国への海の玄関であったことを示しているといえる。このように伊勢の地を海の民の拠点と考えると、ここに一つの問題が出てくる。それはこの地に海神を祀る著名な社がないことである。博多には、古代、大陸との往来に大きな力を持っ



志賀海神社

ていたと考えられている安曇^{あずみ}族がおり、彼らは志賀島の志賀海神社に祭神、綿津見三神を祭祀していた。また、宗像神社もある。難波津には津守氏が住吉の神、筒男三神を祭祀していた。このように船の行き交う主要な湊には海神が祀られていた。従って、伊勢が東国への主要な湊であるとするなら、そこに何かの海神が祀られていたと考えるのが自然であろう。ところが、伊勢にはそのような神が見当たらないのである。伊勢氏の祖と考えられる伊勢津彦も、その後誕生した天日別命にも、海神としてのイメージ

は無く、そのような伝承も無い。このように伊勢側には海神の手掛りは見出せない。ところが、このような状況だけに、もしかしたら大若子命は海神だったのかもしれない、と考えることはできる。そこで、この時代に海神として、大若子命を博多に勧請することが出来たかどうかを検討してみよう。このような可能性について検討するに当たっては、当時の博多の状況を想定しておかなければならない。先ず挙げられるのは住吉神社の存在である。この神社がいつ創建されたのかは定かでないが、恐らく八世紀の前葉と考えられる。この神社の創建は、神功皇后の新羅親征の話に深く関わっている。神功皇后の夫である仲哀天

皇に対して神が現れ、新羅を討つことを勧める。ところが神の言葉を信ぜず、これに随わなかった天皇は、古事記によれば忽ちにして崩御してしまう。その場所が^{かしひみや}檀日宮の地とされている。お告げをした神が住吉の筒男三神である。このような経緯から、神功皇后自らが新羅親征に出かけることになるが、相手が恐れをなして降伏してしまったので、あつけない結果に終わる。

筑紫に戻ったところで神功皇后は子供を産む。後の応神天皇である。その場所を^{うみ}宇瀨と名づけた。このような神功皇后にまつわる神社として、^{かしい}香椎宮と博多の住吉神社及び^{はこさき}筥崎宮がある。これらは大昔からそれぞれの地に建っていたように思われがちであるが、決して、そんな古い時代から存在していたわけではない。先に触れたように、香椎宮の創建は、神亀元年(七二四)のこととされており、^{だいぶ}筥崎宮は嘉穂郡の大分八幡宮から延喜二一年(九二一)に勧請されたとある。思いのほか新しいのである。ところが住吉神社だけは、はっきりしない。なぜだろうか。



香椎宮

それは、神功皇后そのものの存在が疑われているからである。神功皇后は推古天皇以下の女帝をモデルとして、卑弥呼に擬せられた人物ではないかと考えられており、神功皇后の新羅親征物語は、記紀編纂時に創作された話だとされているからである。この物語は一般に「神功皇后伝説」と呼ばれているが、住吉神社と香椎宮はこの神功皇后伝説の正しさを保証するための物証として、急遽建設された可能性がある。日本書紀の完成が養老四年(七二〇)のことから、香椎宮の完成(七二四)は遅ればせながらも間に合った感じである。このような経緯から見ると住吉神社の創建もこの前後と見てよいのではなからうか。というのは、摂津の住吉大社のことは書紀に幾度か出てくるが、この博多の住吉神社のことは、続日本紀にしか出てこないからである。要するに八世紀になってからしか登場しないからである。その根拠となっている書紀、続日本紀の内容を紹介すると次ぎのようになる。摂津の住吉については、

- 天武天皇朱鳥元年(六八六)七月、癸卯に幣を紀伊国に居す国懸神・飛鳥の四社・住吉大神に奉りたまふ。
- 持統天皇六年(六九二)五月、庚寅に、使者を遣して、幣を四所の、伊勢・大倭・住吉・紀伊の大神に奉らしむ。告すに新宮のことを以てす。
- 持統天皇六年(六九二)十二月、甲申に、大夫等を遣して、新羅の調を五社、伊勢・住吉・紀伊・大倭・菟名足に奉る、

のように、七世紀末に三回日本書紀に記載されている。この住吉は全て摂津の住吉神社であって、博多の住吉神社ではない。では、博多の方はというと、これは、

- 続日本紀天平九年(七三七)四月、使を伊勢神宮、大神社、筑紫の住吉、八幡の二社及び香椎宮に遣し、幣を奉て以て、新羅の无禮之状を告ぐ。

と出てくるだけである。无禮とは無礼のことである。ここで初めて博多の住吉神社が登場するが、この住吉神社と香椎宮が伊勢神宮と同列で出てくるところは、これは正史に神

功皇后伝説を取り入れたことに対する一つの配慮と言えよう。

以上のような検討から、博多の住吉神社は続日本紀に基づけば、八世紀の初頭以降、続日本紀天平九年条にその名が明記される、七三七年以前に創建されたと推定される。この推定が正しいとするなら、この時代、博多の地には立派な住吉神社が建っていたことになる。更に博多から幾分離れてはいるが、七二四年には香椎宮も創建されていた。このような状況の中で、住吉神社のすぐ近くに、同じ時期に一地方神に過ぎない大若子命を、海神との触れ込みで博多の地に勧請するなど有り得ないことになる。

以上、大若子命直接勧請説について検討してきたが、その検討結果から次のような結論を得ることができよう。

- 博多の櫛田神社は、祭神である大若子命を勧請しなければならないという強い誘因がなく、社伝のように八世紀になって創建されたと想定するには無理がある。その誘因を大若子命海神説で説明しようとしても、当時の博多には既に住吉神社が創建されており、この説は成り立たない。従って、博多の櫛田神社は八世紀以前に櫛玉命を祀る神社として、創建された可能性が高い。 —

(つづく)

この「古代ヤマトの遠景」に対し、ご意見・ご感想を頂ければ幸いに存じます。>> [\(筆者\)](#)
「古代ヤマトの遠景」: [バックナンバー](#)

■ 関連リンク

- [メールマガジンバックナンバー](#)
- [メールマガジン登録](#)
- [メールマガジン解除](#)

※本メールマガジン上の文書・画像等の無断使用・転載を禁止します。



■ 東京都中央区新川 1-4-1

■ TEL 03-3297-5601 ■ FAX 03-3297-5783

■ URL <http://www.vec.gr.jp> ■ E-MAIL info@vec.gr.jp